瀬戸内国際芸術祭 2019

実施計画

2018 年 3 月 23 日

瀬戸内国際芸術祭実行委員会

目　次

第１章　開催趣旨

「海の復権」..... 1

コンセプト..... 2

瀬戸内国際芸術祭 2019 に向けて..... 3

第２章　開催概要

２．１　名称・会期・会場等..... 4

２．２　重点的な取組みの視点..... 6

第３章　重点プロジェクト

３．１　ものづくり発信プロジェクト..... 7

３．２　アジア交流プロジェクト..... 7

３．３　瀬戸内フラム塾..... 8

第４章　アートプロジェクト

４．１　方針..... 9

４．２　会場ごとの事業展開..... 10

４．３　アーティスト選考..... 24

４．４　スケジュール..... 25

第５章　受入環境の整備

５．１　方針..... 26

５．２　海上交通..... 26

５．３　島内交通..... 27

５．４　本土側のアクセス..... 27

５．５　宿泊対策..... 27

５．６　芸術祭鑑賞ツアー..... 27

５．７　警護・救急体制の整備..... 28

５．８　スケジュール..... 29

第６章　広報

６．１　方針..... 30

６．２　情報発信活動..... 30

６．３　広報ツール..... 32

６．４　スケジュール..... 33

第７章　来場者への情報提供
７．１　方針 34
７．２　公式ウェブサイト 34
７．３　モバイル用アプリ 34
７．４　紙媒体 35
７．５　案内所の設置 35
７．６　スケジュール 36

第８章　芸術祭サポーター
８．１　方針 37
８．２　ボランティアサポーター「こえび隊」 37
８．３　地域サポーター、企業サポーター、学生サポーター 37
８．４　スケジュール 39

第９章　連携・コラボレーション
９．１　方針 40
９．２　寄付・協賛等 40
９．３　他の文化・芸術事業との連携 40
９．４　割引協力施設 41
９．５　スケジュール 42

第１０章　チケット、グッズ開発
10．１　方針 43
10．２　チケット 43
10．３　グッズ開発 43
10．４　スケジュール 44

第１１章　地域への波及
11．１　方針 45
11．２　島間交流 45
11．３　学校との連携 45
11．４　スケジュール 46

第１２章　収支計画 47

【参考】全体スケジュール

第１章　開催趣旨

「海の復権」

「島のおじいさんおばあさんの笑顔を見たい。」―そのためには、人が訪れる“観光”が島の人々の“感幸”でなければならず、この芸術祭が島の将来の展望につながって欲しい。ということが、このプロジェクトで当初から掲げてきた目的＝『海の復権』です。

世界のグローバル化・効率化・均質化の流れの中で、島々の人口減少、高齢化の進行、地域の活力の低下が顕著となり、島の固有性は失われつつあります。私たちは、美しい自然と人間が交錯し交響してきた瀬戸内の島々に活力を取り戻し、瀬戸内が地球上のすべての地域の『希望の海』となることを目指し、瀬戸内国際芸術祭（以下「芸術祭」と表記します。）を開催していきます。

2010 年から始まった芸術祭は、2013 年の第 2 回芸術祭から春・夏・秋の３シーズンに分けて開催したことによりほぼ１年間が会期となり、また芸術祭会期以外の通年の活性化も含めて、毎年続く事業になりました。第 2 回芸術祭以降、会場は 12 島と拡大し、「あるものを活かし新しい価値を生みだす」という当初からの方針のもと、現代アートの作家や建築家と、そこに暮らす人々との協働により、さらに地域の資源が生き返りました。また、それぞれの島が持つ特色の違いを浮き彫りにすることは、空間を巡る旅であるだけではなく、この列島が辿ってきた時間を巡る旅になりました。遥か三万年以前、海上の道を経てイヴ（ホモサピエンス）の子孫たちが極東の島にやってきたこと、この列島は岬を繋ぐことで素早い文化の伝達ができたこと、それ故、漁と農と家づくりが一体となってここに住む人たちの基本となったことを教えてくれました。

そして有史以来この瀬戸内海が日本列島のコブクロであり、この海を舞台に灘波津からの近畿中央文化ができたこと、源平、室町、戦国時代へとつながる資源の争奪の場であったこと、北前船の母港として列島全体を活性化したこと、朝鮮通信使による大切な大陸文化の継続した蓄積の通路であったことも知るのでした。しかしこの静かで豊かな交流の海は近代以降、政治的には隔離され、分断され、工業開発や海砂利採取等による海のやせ細り、地球環境上の衰退を余儀なくされ、これがグローバル化されつつある効率化の中で、島に人が住まなくなる、という事態にまで至ったのです。これらは芸術祭を通して明らかになってきたことです。以上を踏まえて前回、第 3 回の芸術祭では、

1. 一年にわたる食のフラム塾の研修を経て、各島で瀬戸内の島ならではの地元料理の提供等、食こそ地域を知り、地域と関わる文

化として力をいれ、食は飛躍的に進歩したとの評価をいただきました。

2. さらに地元独自の文化である「盆栽」「獅子舞」に焦点をあてたプロジェクトを展開し、多大な関心を集めました。
3. 一層の国際化を進めるべく、第 2 回のバングラデシュに続いてタイの民族文化を披露する「タイ ファクトリーマーケット」、アジア 12 の国と地域のパフォーマンスが一堂に会する「APAMS2016」公演が高松で開催されました。APAMS は、平日は各島に入り、地域との密接な関わりがありました。また「瀬戸内アジアフォーラム」ではアジア 10 の国と地域から 26 団体の参加を経て、美術・文化による地域づくりの可能性について話し合われました。

第 4 回の芸術祭は、これらの取組みの上に進められます。

日本列島の人の移動、文明の発祥からはじまり、海に囲まれどこからでもアプローチできること、海と山がつながること、そして農・工・商が混在した原初の人びとの存在を教えてくれる瀬戸内の島巡りを通し、この先地球上に人が生きること、展望を持つことを第 4 回芸術祭でも考えていきます。

コンセプト

1　アート・建築－地域の特徴の発見

固有の場所で展開されるアートや建築は、その場所へ人を惹きつける力を持ちます。瀬戸内の持つ美しい景観と自然の中で、アートは人間が自然に関わるための「技術」となり、そこに流れてきた時間、文化、歴史を活かします。

2　民俗－地域と時間

それぞれの地域・島で育まれてきた固有の民俗、農業や漁業、獅子舞等のお祭り、丁場や産業遺産、盆栽等、瀬戸内の島々に継承される多様な生活・芸術を活かします。

3　生活－住民（島のお年寄りたち）の元気

島々で営まれてきた生活、歴史に焦点を当て、島外の人々の参加を得たイベントをきっかけに、地域再生の機会を探ります。

4　交流－日本全国・世界各国の人々が関わる

世代・地域・ジャンルを超えた人々が集い、地域の人々と協働し、作品を創り上げます。海外の、とりわけアジアの地域との協働プロジェクトに取り組み、多くの参加を目指します。また、“こえび隊”として登録した人々が、より深く地域づくりに参加することを促します。地域の再生は、そこに住む人だけでは難しく、世界は具体的な顔

が見える協働により元気になると考えるからです。

5　世界の叡智－この地を掘り下げ、世界とつながる場所に

地元の大学などとも連携しながら、芸術祭を通して、地域で活動し、美術や建築、音楽、パフォーミングアーツ、科学、文学、思想、哲学、映画、スポーツ、国際交流等、さまざまな分野が集い、作業し歓談する場をつくります。これらがやがて地域固有の文化に光を当て、地域再興の灯台となるように動きます。

6　未来－次代を担う若者や子どもたちへ

次代を担う若者や子どもたちが、芸術祭を作るプロセスを共有し、世代・地域を越えて集まる人々と協働します。世界の第一線で活躍するアーティストたちの作品は五感を通して子どもたちに伝わります。新しい事象に出会う感動と、身体感覚に刻まれた豊かな体験は、瀬戸内の未来を拓く大きな原動力となります。

7　縁をつくる－通年活動

芸術祭の開催により、それぞれの島に新しい縁ができました。島間の交流を活発化し、それぞれの地域が独自に動き、そこから新しい島と瀬戸内海再生の機会を生んでいくように活動します。芸術祭は、グローバルな時代の中で各地域の文化を活かして生きていくというアジアのモデルの 1 つとなってきていますし、多くのアジア人の交流の場になってきています。これからますます海を通したつながり、里海ともいえる日本列島の暮らしに目を注ぎ、それぞれの地域が他所と繋がっていくために活動していきます。その中で芸術祭を支える人材がますます必要になってきているので、育てるための努力をしていきます。

瀬戸内国際芸術祭 2019 に向けて

初回 2010 年の芸術祭を終えて以降これまで、3 年ごとに「瀬戸内国際芸術祭」を開催するとともに、芸術祭の会期以外においても島の活力を高めていくため、年間を通した作品の公開やイベントの実施、こえび隊による島の行事への参加など、芸術祭も含めた地域におけるアート活動全体を「ART SETOUCHI」と総称し、実践してきました。

2019 年の芸術祭開催に向けて、この「ART SETOUCHI」活動に引き続き取り組むとともに、その翌年が初回開催から 10 年の節目となる 2020 年となることも踏まえて、地域の未来を見つめた活動の充実を図っていきます。

第２章　開催概要

2-1　名称・会期・会場等

(1) 名称

瀬戸内国際芸術祭 2019
Setouchi Triennale 2019

(2) 会期

季節	シーズンテーマ	会期	日数
春	ふれあう春	4 月 26 日（金）～5 月 26 日（日）	31 日
夏	あつまる夏	7 月 19 日（金）～8 月 25 日（日）	38 日
秋	ひろがる秋	9 月 28 日（土）～11 月 4 日（月）	38 日
合計日数			107 日

【会期設定について】

会期は、過去２回と同じく、温帯地域の弧状列島である日本の大きな特徴である「四季」を海外の人々に知ってもらうため、春・夏・秋の３シーズンに分けて開催します。その上で、各シーズンにテーマを設け、会期毎の特徴を際立たせます。

<ふれあう春>

おだやかな春、４月 26 日（金）に開幕します。寒い冬が明け、３月から４月にかけての準備期間も含め、アーティストや全国から訪れるサポーターと地域の人々が作品制作などを通してふれあいながら、ともにじっくりと芸術祭を作り上げていくはじまりの季節とします。

<あつまる夏>

熱を帯びる夏は、アジアとのつながりを深めます。各国の職人やアーティスト、パフォーマーがこの地に集結し、文字どおり熱いイベントなどを行います。さらには日本全国、世界中からのサポーターや旅人が瀬戸内に集い、国境を超えた交流・つながりを生み出す季節とします。

<ひろがる秋>

フィナーレへと向かう豊かな秋は、芸術祭に関わる人たちの結びつきがより強固に確立され、瀬戸内の島々に活力を取り戻すための次なる動きにつながる「縁」が形を成す期間となります。前回よりも拡大した会期、そして全会期中最大の会場数となるこのシーズンは、期間とエリアの広がりに伴ってさまざまな作品やパフォーマンスを展開し、地域再生の「縁」を拡大していきます。

(3) 会場

直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、沙弥島（春会期）、本島（秋会期）、高見島（秋会期）、粟島（秋会期）、伊吹島（秋会期）、高松港周辺、宇野港周辺

(4) 主催

瀬戸内国際芸術祭実行委員会
会長：浜田恵造（香川県知事）
名誉会長：真鍋武紀（前香川県知事）
副会長：渡邊智樹（香川県商工会議所連合会会長）
：大西秀人（高松市長）
顧問：梅原利之（四国旅客鉄道株式会社顧問）
総合プロデューサー：福武總一郎（公益財団法人福武財団理事長）
総合ディレクター：北川フラム（アートディレクター）
構成団体：香川県、高松市、丸亀市、坂出市、観音寺市、三豊市、土庄町、小豆島町、直島町、多度津町、玉野市、（公財）福武財団、（公財）福武教育文化振興財団、香川県市長会、香川県町村会、四国経済産業局、四国地方整備局、四国運輸局、中国四国地方環境事務所高松事務所、国立療養所大島青松園、四国経済連合会、香川県商工会議所連合会、香川県商工会連合会、（一社）香川経済同友会、香川県農業協同組合、香川県漁業協同組合連合会、香川大学、四国学院大学、徳島文理大学、高松大学、香川県文化協会、（公財）四国民家博物館、（公社）香川県観光協会、（一社）日本旅行業協会中四国支部香川地区委員会、（公財）高松観光コンベンション・ビューロー、香川県ホテル旅館生活衛生同業組合、四国旅客鉄道（株）、高松琴平電気鉄道（株）、香川県旅客船協会、（一社）香川県バス協会、香川県タクシー協同組合、（公財）香川県老人クラブ連合会、香川県婦人団体連絡協議会、（公社）日本青年会議所四国地区香川ブロック協議会、香川県青年団体協議会、さぬき瀬戸塾／監事：（株）百十四銀行、（株）香川銀行／オブザーバー：岡山市、岡山県商工会議所連合会、岡山大学

2-2　重点的な取組みの視点

前回の芸術祭では、島々でのアート、建築の展開に加え、「海でつながるアジア・世界との交流」、「瀬戸内の『食』を味わう食プロジェクト」、「地域文化の独自性発信」に取り組み、アジアとのつながりを深め、「食」を通じて島々の魅力を伝え、この地域の伝統文化の厚みを披露しました。

今回、これらを発展させる形で重点的に取り組むプロジェクトを検討し、強力なアート、建築のプロジェクトはもちろんのこと、アジアとの交流を促進するとともに、島の住民同士の交流や、地域住民とアーティストの交流など、さまざまな交流の機会を拡大していきます。また、「食」に加え、宿泊など島の滞在全体が充実したものとなるよう、地域の人材育成に取り組むほか、地域の独自文化の発信として、地域の伝統文化の中で育まれてきた「ものづくり」に焦点を当てます。

これらの取組みにより、芸術祭が当初から掲げてきたコンセプト“縁をつくる”を具体化し、芸術祭の「来場者」がこの地域を訪れ定着する「来住者」となっていくことを目指します。

(1) みつける―瀬戸内に光る「モノ」「コト」「ヒト」の発掘と発信

前回の芸術祭では、現代アートの展開に加え、香川県、瀬戸内が誇る文化に着目し、地域に根付く「盆栽」や「獅子舞」を現代的視点から捉え、それぞれひとつのプロジェクトとして昇華しました。今回、この地域文化への関わりを、さらに独創性のある「モノ」や「コト」に広げ、地域の伝統文化の中で育まれてきた「ものづくり」を、特徴的な活動を行う「ヒト」の視点から掘り起し、世界に向けて発信します。

(2) つながる―人と人、島と島、地域と世界との交流

地域住民とアーティスト、ボランティアサポーターや来場者との交流、島の住民同士の交流など、芸術祭を通じ、さまざまな交流の機会を設けることで、地域の活性化を図ります。また、海外に向けて積極的に情報を発信していくとともに、各種フォーラムやパフォーマンス大会など、海外の方々と交流できるイベント等を開催することにより、アジア諸国をはじめとする世界各国とのつながりを強めていきます。

(3) はぐくむ―島の「滞在」を彩る担い手の育成

前回の「瀬戸内『食』のフラム塾」の成果を踏まえ、「食」のみならず、飲食・宿泊等の施設運営・経営や、アートマネジメント、ボランティアマネジメント等、地域の活性化を担う人材の育成を目的とした「瀬戸内フラム塾」に 2017 年度から取り組み、次回芸術祭での発展につなげていきます。

第 3 章　重点プロジェクト

3-1　ものづくり発信プロジェクト

地域の生活に根ざすなかで生まれてきた加工品、伝統工芸、あるいは画期的な新製品など、香川県・瀬戸内ではものづくりが盛んです。また、もともとの農水産物も多く、それらに焦点をあてアート的な展開をし、発信、発表、展示、販売に力を入れます。特にその発表では来場者に面白く体験をしてもらうべく、美術的な工夫を凝らすつもりです。盆栽や工芸品、希少糖、農水産物などが高松港周辺で展開されます。

3-2　アジア交流プロジェクト

過疎の島を美術のもつ発見力、媒介力を契機に元気にするという瀬戸内国際芸術祭は、国内だけではなく海外の人々、地域に可能性を示し、さまざまな国からの視察が絶えません。外交的、経済的に混乱し始めたグローバル化のなかで、外国、特にアジアの国々が瀬戸内国際芸術祭に寄せる関心は極めて高くなっています。

それらの国々のアートイベント、美術グループが、瀬戸内国際芸術祭にアーティストを中心に関わり、恒常的な関係をもつことはさまざまな可能性をもつだろうと思われます。それぞれの国からのアーティストや関係者は、ウィークデイは各島の集落をベースに地元の人たちと交流し、週末には高松港を中心にイベントを繰り広げます。また、世界に向けてその交流や活動を、高松港周辺を拠点に発信します。

3-3　瀬戸内フラム塾

芸術祭 2019 の開催に向けて、アーティストが行う作品制作やイベント開催などの活動支援、アートの展開を通じた地域住民・ボランティアサポーターとの地域再生に向けた取組み、飲食、宿泊の提供など、芸術祭をさまざまな角度から支え、地域の活性化を担う人材を発掘し、育成するため、瀬戸内フラム塾「地域型芸術祭のつくられ方」と題し、実践を含めた勉強会を開催します。

塾生は、芸術祭の活動や意義などを座学で学び、そのうちの希望者は、4 つの分野に分かれて実地研修に参加し、アート管理運営などの取組みを実践的に学びます。

また、塾生は、研修で培った知識や経験にあわせて、芸術祭 2019 に関連したさまざまな活動や取組みに積極的に関わります。

（研修分野）

①アート制作

②イベント・ワークショップの企画・運営

③地域のリソースを掘り起こして魅力として伝えるコーディネーター

④食の提供

第４章　アートプロジェクト

4-1　方針

地域とのつながりを一層強めていけるようなアートプロジェクトを展開するとともに、これまでの芸術祭において蓄積されたアート作品を、会場ごとの特色を踏まえ、より一層発展させます。

なお、各会場におけるアート展開を検討するにあたっては、各地域の活性化に関わるさまざまな関係者を交えて議論を行うことにより方向性を確認し、できる限り地域住民等との協力関係の下に作品の制作やイベントの運営等を行います。特にいくつかの島では長期的な視野をもって外国のアーティスト、チームと関わっていくような配置をします。

また、芸術祭の趣旨に合致し来場者や地域住民等に感動を与えた作品をクローズアップし表彰等を行うことで、芸術祭のコンセプトや活動等を広く多くの人に認知してもらうとともに、アーティスト、来場者、島民など芸術祭に関係するすべての者にとって有意義で、吸引力を持つ芸術祭とします。

4-2　会場ごとの事業展開

一直島

特色・コンセプト
古くから瀬戸内海の交通の要衝として栄え、人びとは漁業や製塩、海運交易に携わってきたが、20 世紀になると、銅や金などの貴金属の製錬が盛んになり、近代工業の島へと発展した。また、今では現代アートの聖地として世界に知られている。 豊かなアート施設や高い知名度により、芸術祭の会場となる島々の中で中心的役割を果たしている。
2016 までの取組み
初回芸術祭にあわせ、直島銭湯「Ｉ❤湯（2009～）」、李禹煥美術館（2010～）が整備された。そして次の回には ANDO MUSEUM（2013～）や宮浦ギャラリー六区（2013～）が誕生。また、2016 年の芸術祭に先駆けて直島ホール（2015～）が完成するなどアート、建築の充実が図られている。また、全国でも珍しい女性だけで演じる直島女文楽の公演を毎回の芸術祭で行うなど、固有の文化の発信も行ってきた。
今後の展開方針・展開内容
＜美術による体験や学習の充実＞ これまでに蓄積されてきた豊かなアート施設を活かしつつ、今後は特にアーティストの参加による学校での美術体験に力を入れていく。 そのため、島の住民、特に子どもたちが関わるイベントやワークショップに力を入れ、地域住民と来場者の交流も生み出す。 また、重点プロジェクトとして取り組むアジア交流プロジェクトにおいて、諸地域とのさらなる協働の跳躍台となることを目指したフォーラムを開催する。 これまでに整備されてきた既存作品、関連作品の価値を高める取り組みも行う。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 直島パヴィリオン	 直島ホール	 家プロジェクト	 ベネッセハウスミュージアム	 赤かぼちゃ

―豊島

特色・コンセプト
古来より稲作をはじめとした農業や酪農、そして漁業が盛んな豊かな島であり、またかつては、「豊島千軒、石工千人」と言われるほど石材業が盛んであった。2017 年 6 月、全国的な注目を集めた不法投棄による産業廃棄物の処理が完了し、一つの区切りの時期を迎えている。 離島でありながら、かつては米を島外に出すほどの収穫があった肥沃な土地と地形を持つこの島の特性を活かし、「食」と「アート」を掛け合わせることによって、「自給自足」「地産地消」の新しい地域社会のあり方を発信することを目指して、芸術祭での活動を始めており、美しい棚田の一角に建設された豊島美術館を軸に、家浦、唐櫃、甲生の 3 つの集落などに作品を展開している。
2016 までの取組み
食とアートで人々をつなぐプラットホームとして 2010 年に島キッチンを整備し、同じ年に、地元住民が再生した棚田の景観の中に水滴をモチーフにした「豊島美術館」や「心臓音のアーカイブ」が誕生した。その後も、生と死などをテーマに、「豊島横尾館（2013～）」や「ささやきの森（2016～）」などの作品も加わり、作品の充実が進んでいる。また、島キッチンでは芸術祭会期外も毎月、「島のお誕生会」が開かれ、住民と来場者の交流が生まれている。
今後の展開方針・展開内容
＜アートと農業との結合＞ アートと農業の関わり方をベースにした活動方針をたて、既存施設の回遊が行われるようにするほか、民泊を充実させていき、島民と訪問者の協働をはかっていくとともに、これまでの作品展開場所を活かしつつ、新規作品の公開を行う。 島キッチンで継続開催している「島のお誕生会」を中核にイベントを展開する。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 あなたが愛するものはあなたを泣かせもする（日本フランチャイズバージョン）	 針工場	 トムナフーリ	 空の粒子／唐櫃	 あなたの最初の色（私の中の解、私の胃の中の溶液）
 島キッチン	 檸檬ホテル	 勝者はいないーマルチ・バスケットボール	 豊島シーウォールハウス	 豊島八百万ラボ

ー女木島

特色・コンセプト
島の山頂近くに大きな洞窟があり、それが「鬼ヶ島伝説」の鬼の洞窟と言われ、鬼ヶ島として知られるようになった。島の風景を特徴づけるのが「オオテ」と呼ばれる高い石垣で、冬場の強風から家屋を守っている。 島そのものの美しさを活かし、島の生活を体感できるよう、海・波・風・樹・光等をテーマにした、五感を通して島の自然を体感させる作品や、休校中の小学校や空家など、既存の施設を活かした作品を展開している。
2016 までの取組み
目に見えない風の形を視覚化した「カモメの駐車場（2010～）」や幻想的な光を反射する「均衡（2010～）」のほか、休校中の小学校を大胆に活用した「女根／めこん（2013～）」といった作品を展開してきた。 2016 年には、「ISLAND THEATRE MEGI『女木島名画座』（2016～）」や地域住民が深くかかわった「西浦の塔（OK タワー）（2016）」が好評を博し、新しい方向性として「feel feel BONSAI（2016）」において地域文化である盆栽に光を当てた。
今後の展開方針・展開内容
＜島全体の一体的作品展開＞ 西浦も含めて、鬼ヶ島という伝説と島の施設全体がアイデンティティをもって連動する作品展開を行っていく。 現代の「鬼ヶ島」が美術的香りの強い小さなお店群によって、島の人たちにとって便利で、他所から来る人にとっては貴重な地域として特色あるスポットになるように、アーティスト、建築家による個性ある店をつくる。

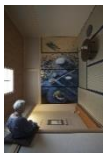
主な既存作品・継続展開プロジェクト

 カモメの駐車場	 20 世紀の回想	 均衡	 段々の風	 オニノコ瓦プロジェクト
 不在の存在	 女根/めこん	 MEGI HOUSE	 ISLAND THEATRE MEGI「女木島名画座」	

―男木島

特色・コンセプト
昔からこの島では、男性は海へ漁に行き、あとに残る女性が畑の担い手であった。また、どの家でも耕作牛を飼っており、農繁期には高松の農家にその牛を貸す、借耕牛の習慣が昭和 30 年代ごろまで続いていた。 島に連綿と続く漁村の生活に触れ、その息づきを体感させるよう、男木島独特の斜面に形成された集落を回遊し、石垣の路地などを利用して、島独自の空間を体験できる作品や、また、漁村の生活に触れることができるよう民家の土間などを利用した作品の展開を行っている。
2016 までの取組み
島を訪れた人を出迎える男木交流館の「男木島の魂（2010～）」を基点に、細い路地のところどころに点在する「男木島 路地壁画プロジェクト wallalley（2010～）」、男木島の記憶を封入した「記憶のボトル（2013～）」などの作品を展開してきた。2013 年の昭和 40 年会の活動がひとつの引き金となり、一度は休校した小中学校が 2014 年に再開、移住者が島に活気を与え、島の未来への希望が生まれている。
今後の展開方針・展開内容
＜地域の変化への連動＞ 移住者を交えた島民が芸術祭活動と連動しつつも、理想的な共同体をつくっていくための方策にアートが伴走していくようにする。 これまでの展開を踏まえて、引き続き地域の生活を映し出すことができる作家を選定し、空家の展開に力を入れ、独特の景観を保持しながら、路地を巡る楽しさを演出できる作品を制作する。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 男木島の魂	 男木島　路地壁画プロジェクト　wallalley	 オンバ・ファクトリー	 カレードスコープ ブラック＆ホワイト	 アキノリウム
 自転－公転	 記憶のボトル	 部屋の中の部屋	 青空を夢見て	 歩く方舟

―小豆島

特色・コンセプト
古くは「あずきしま」と呼ばれ、「古事記」にも登場する小豆島は、日本で初めてオリーブの栽培に成功して以来、オリーブの栽培が盛んで、「オリーブの島」として親しまれてきた。寒霞渓、エンジェルロードに代表されるような観光地としても有名であり、歴史と自然が調和した多様で魅力ある島である。 芸術祭では、土庄港周辺、肥土山・中山地区、三都半島、醤の郷（馬木・苗羽）、坂手地区、福田地区などを小豆島の軸とし、それぞれ特徴的なアートプロジェクトを展開してきた。また、「福武ハウス」を中心にアジアにおける地域文化のコミュニティを通した交流を行っている。
2016 までの取組み
オリーブの葉を王冠の形にした彫刻「太陽の贈り物（2013～土庄港）」や、閉校となった小学校をリノベーションした「福武ハウス（2013～福田）」、「オリーブのリーゼント（2013～馬木・醤の郷）」、「アンガー・フロム・ザ・ボトム美井戸神社（2013～坂手）」など、各地区に作品を展開してきた。 三都半島では、地域住民とアーティストとの連携事業が営まれ、アートプロジェクトが継続的に展開されている。 肥土山・中山地区では、わらアートや、地元産の竹を組んだ巨大なドーム作品が人気を集め、2010 年、2013 年に引き続き、2016 年にも「オリーブの夢（2016、中山）」などの作品が新たな形態で制作された。また、2016 年には、大部、北浦にも作品設置エリアを拡大し、島民が制作に携わった「国境を越えて・潮（2016、大部）」などの作品が注目を集めるとともに、食プロジェクトにも力が入れられ、各所で島民によるおもてなしが行われた。
今後の展開方針・展開内容
＜地域づくりを促進するアート活動＞ 小豆島では初回芸術祭の中山・肥土山地区から始まり、以降、各港をベースに作品展開を行ってきた。この動きをベースに土庄町、小豆島町それぞれの地域振興方針に関わるように作品展開を進めていく。 これまでの流れを引き継ぎながら、小豆島のスケール感にふさわしい作家、作品による展開を図る。福武ハウスでは、アジアとの交流を一層深める。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 太陽の贈り物	 アートノショーターミナル	 小豆島の木	 猪鹿垣の島	 花寿波島の秘密
 つぎつぎきんつぎ	 潮耳荘	 福武ハウス		

―大島

特色・コンセプト
昔ながらの美しい瀬戸内の島の風景が残る大島は、1909 年にハンセン病の療養所である大島青松園が設立され、長期にわたる国の隔離政策によって、入所者は多くの苦痛と悲しみを余儀なくされた。現在は、往来が自由になり、入所者全員がハンセン病の基本治療を終え、日常生活の支援と、ハンセン病を正しく理解するための活動が行われている。 他の島とは異なる環境であることから、作品の制作プロセスや公開方法・展示場所などは、プロジェクトの活動プロセスの中で検討し、住民と来島者とのかかわりの中で、美術を通して地域と人の豊かな環境を構築するため、「やさしい美術プロジェクト」を展開してきた。
2016 までの取組み
入所者との交流を深め、島の内外のつながりを紡ぎ出す「やさしい美術プロジェクト」や地域と人の豊かな環境を整備してきた田島征三の活動を中心に、こえび隊の会期外も含めたガイドの実施など丁寧な活動を続けている。また、「大島の在り方を考える会」を経て、こどものためのサマーキャンプやラジオ番組「大島アワー」といった入所者の意思に伴奏する活動が生まれた。
今後の展開方針・展開内容
＜将来のあり方を見据えた展開＞ 住民、大島青松園、高松市、香川県と連携しながら、今までの活動を維持しつつ、こどもサマーキャンプの充実など将来の島のあり方を見据えた活動を行う。 大島の歴史に焦点を当てて表現できる作家を選定し、美術を通して島に関わるプロジェクトを展開する。

主な既存作品・継続展開プロジェクト


森の小径


青空水族館


{つながりの家}
大島資料室・北海道書庫


{つながりの家}
GALLERY15「海のこだま」


{つながりの家}
カフェ・シヨル


歩みきたりて

―犬島

特色・コンセプト
1909 年に銅製錬所が開設され、島の人口は、一時期 5,000 人を超えたが、1919 年の製錬所の閉鎖などにより、人口は減少の一途を辿った。 経済産業省による「近代化産業遺産群」の一つとして、製錬所跡地が認定された。この製錬所の遺構を保存し、環境に負荷を与えない施設として再生するなど、犬島全体を「建築・現代アート・環境」による新たな循環型社会のモデルとすることを目指したプロジェクトを展開している。また、犬島独自の空間と歴史を活かした演劇なども開催している。
2016 までの取組み
2008 年に近代化産業遺産である犬島製錬所の遺構を保存・再生した「犬島精錬所美術館」が開館し、2010 年には犬島の集落に犬島「家プロジェクト」を開始。会期毎に一部の作品を入れ替えながら展開してきた。2016 年には、小林武史の「円都空間」をはじめとするパフォーミングアーツを開催。また、犬島 くらしの植物園を開園し、食べ物からエネルギーに至るまで、自給自足をしながら自然とともにくらす歓びを体験できる場づくりを実施してきた。
今後の展開方針・展開内容
＜次世代のための循環型・持続可能な社会のモデルをつくる＞ 犬島の歴史・文化・資源・人をより体感できる取組みを具現化し、「滞在」を通して島民と来島者がともに次世代の循環型・持続可能な「くらし方」「生き方」を犬島ランドスケーププロジェクトとして 2016 年から始動した「犬島　くらしの植物園」の活動などを中心に、一緒に考えていけるような機会と空間を提供する。 作品の更新を行うほか、島での滞在施設の整備に取りかかる。この場所でしかできない体験として、パフォーミングアーツに力を入れる。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 犬島「家プロジェクト」	 犬島 くらしの植物園	 犬島精錬所美術館

―沙弥島

特色・コンセプト
万葉集の柿本人麻呂の長歌に詠まれているなど歴史深い島。番の州工業地帯の大規模な埋め立て造成によって、1960 年代後半に東隣の瀬居島とともに陸続きになった。現在は、東側に瀬戸大橋記念公園が整備され、夏場は「快水浴場百選」(環境省)に選ばれた沙弥島海水浴場が多くの海水浴客でにぎわっている。 沙弥島をはじめ、与島地区 5 島や坂出市の特徴をとらえ、地域の歴史や文化を活かした活動が行われている。
2016 までの取組み
2013 年から会場に加わり、2013、2016 といずれも春会期に参加。沙弥島の新たなスポットとして親しまれている小高い丘の作品「階層・地層・層(2013～)」や、沙弥島、瀬居島、与島、岩黒島、櫃石島の 5 つの島に暮らす人々が協働して制作した巨大でカラフルな作品「そらあみ＜島巡り＞」(2013、2016)、また、旧沙弥小・中学校における神戸芸術工科大学のアートプロジェクトや「沙弥島・西ノ浜の家(2013～)」での地元の食のプロジェクト、瀬戸大橋を一望できるナカンダ浜の絶景ポイントに設置されたベンチの作品「八人九脚(2013～※現在は瀬戸大橋記念公園に移設)」など、島の歴史や現状を魅力的に伝える作品を、ワークショップなど地域の住民との共同作業を通して展開してきた。
今後の展開方針・展開内容
＜与島地区 5 島のつながりを深める＞ 従来の展開を受け継ぎつつ、与島地区 5 島の連携を図る作品展開を考えていく。 地域の伝統行事も活かしながら、春会期にふさわしい作品、イベントを計画する。 中西讃の島においては、アジア地域と恒常的かつ密接な関係を築いていけるよう、各国の芸術祭やアートグループとの連携も視野に、アーティストを選定する。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

		
階層・地層・層	沙弥島・西ノ浜の家	八人九脚

一本島

特色・コンセプト
優れた航海技術を持った塩飽水軍の本拠地として栄え、いたる所に人名（にんみょう）統治の歴史的遺産が残っている。日本人の手で初めて太平洋を渡った咸臨丸の乗組員の多くは塩飽の船乗りであった。また、船乗りの一部は、造船技術を活かし、宮大工や家大工として「塩飽大工」の名を世に知らしめた。 塩飽勤番所跡、千歳座、笠島地区など、島に存在する歴史ある地域資産を保存し、活かす活動を行っている。
2016 までの取組み
2013 年から会場に加わり、2013、2016 といずれも秋会期に参加。塩飽大工衆の復活を願い活動を開始させた「善根湯×版築プロジェクト（2013～）」や、瀬戸内の美しさをヨーロッパに伝えたシーボルトをモチーフにした作品「シーボルトガーデン（2013～）」のほか、海辺に和船を思わせる立体作品を設置した「水の下の空（2016～）」、咸臨丸の水夫の生家を作品にした「咸臨の家（2016～）」、両墓制に着目した「産屋から、殯屋から（2016～）」など、島にちなんだ作品を展開してきた。また、重要伝統的建造物群保存地区の笠島集落を作品展開の基点とし、島の歴史ある地域資産を作品と共に紹介した。
今後の展開方針・展開内容
＜島の歴史に焦点を当てる＞ 塩飽水軍の本拠地として栄えた島独特の歴史、重要伝統的建造物群保存地区に選定されるほどの整った町並みに作品をあわせて制作していく。 笠島地区の独特の景観を活かすなど、島のポテンシャルを引き出す作品を制作する。 中西讃の島においては、アジア地域と恒常的かつ密接な関係を築いていけるよう、各国の芸術祭やアートグループとの連携も視野に、アーティストを選定する。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 Vertrek「出航」	 シーボルトガーデン	 漆喰・鏝絵かんばんプロジェクト	 善根湯×版築プロジェクト	 水の下の空
 産屋から、殯屋から	 咸臨の家			

―高見島

特色・コンセプト
急傾斜地に家が建ち並び、縫うように小路が伸びる独特の古い町並みと自然石の乱れ積みの石垣を残している。かつては、蚊取り線香の原料である除虫菊の栽培が盛んで、人口は一時期 1000 人を超えたが、今では、殺虫剤の普及により生産は途絶え、人口もわずかになっている。 廃校となった高見小学校や空き家を活用した作品展開を行いながら、地域独特の食文化である茶がゆを振る舞うなど、地域住民による来場者へのお接待も行われてきた。
2016 までの取組み
2013 年から会場に加わり、2013、2016 といずれも秋会期に参加。2013 年から活動を継続している京都精華大学チームのアートプロジェクトを中心に、作品展開を行っている。 高台に位置する庭や納屋をレストランとして改装した「海のテラス（2013～)」や「除虫菊の家（2013～)」、古民家に小さな穴を膨大に開けた「うつりかわりの家（2013～)」、古民家の壁に突き刺さったアクリル板を通じて光が室内へと射し込む「時のふる家（2016～)」など、島に残された伝統的な古民家の記憶や祭り、かつて栽培が盛んであった除虫菊などを題材にした作品を展開してきた。
今後の展開方針・展開内容
＜アートイベントの充実＞ 引き続き京都精華大学のプロジェクトを中心にアート展開を図るほか、島外からの参加があるイベントを展開する。 中西讃の島においては、アジア地域と恒常的かつ密接な関係を築いていけるよう、各国の芸術祭やアートグループとの連携も視野に、アーティストを選定する。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

			
うつりかわりの家	除虫菊の家	海のテラス	時のふる家

―粟島

特色・コンセプト
戦国時代は塩飽水軍の拠点となり、江戸時代から明治初期まで北前船の寄港地として栄えた。その後、1897 年に日本で最初の国立海員学校が設立され、多くの船乗りを輩出したが、海運業の衰退で 1987 年に閉鎖された。その跡地に、粟島海洋記念公園として整備された「粟島海洋記念館」は、島のシンボルとなっており、90 年間の歴史と誇りが今も色濃く残っている。 2010 年から続く日比野克彦の「瀬戸内海底探査船美術館プロジェクト」を基軸に、瀬戸内海の歴史や魅力を感じさせるアートプロジェクトを展開している。
2016 までの取組み
2013 年から会場に加わり、2013、2016 といずれも秋会期に参加。海底から引き揚げた品々を展示する「一昨日丸」や「ソコソコ想像所」などの「瀬戸内海底探査船美術館プロジェクト（2010～)」を基軸に作品を展開している。また、使われなくなった郵便局を一部改装し、「漂流私書箱」を設置した「漂流郵便局（2013～)」が全国的な話題を集めた。2016 年には旧幼稚園や島の廃校を使用した「思考の輪郭（2016)」「過ぎ去った子供達の歌（2016)」などのインスターレーションを展開した。また、粟島芸術家村で、「粟島アーティスト・イン・レジデンス」作家等の作品展示を行った。
今後の展開方針・展開内容
＜海洋記念館を基点とした作品の広がり＞ 拠点施設である粟島海洋記念館の改修工事が行われることを踏まえ、その内容に芸術祭が関わりを持つように作品を展開していく。記念館を基点に作品の広がりが島全体にもたらされることを重視する。 瀬戸内海底探査船美術館プロジェクトを基軸に、粟島海洋記念館の活用を図りながら作品を展開する。 中西讃の島においては、アジア地域と恒常的かつ密接な関係を築いていけるよう、各国の芸術祭やアートグループとの連携も視野に、アーティストを選定する。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 瀬戸内海底探査船美術館プロジェクト	 須田港待合所プロジェクト

―伊吹島

特色・コンセプト
他島から離れて燧灘(ひうちなだ)に浮かぶ伊吹島は、独特の趣を湛え、日本で唯一、平安時代の京言葉のアクセントを残す島でもある。また、讃岐うどんのダシに欠かせない良質な煮干し（イリコ）の生産が盛んで、この「伊吹いりこ」は島の名産として全国に出荷されている。 島の活気ある漁撈文化を活かすとともに、歴史資産を明らかにする活動を展開している。
2016 までの取組み
2013 年から会場に加わり、2013 は夏、2016 は秋会期に参加。廃校の校庭に設置した「トイレの家（2013～）」、漁網や浮きなどの漁道具や生活用品を素材に島の人たちや小中学生らとともに作った「沈まぬ船（2013～）」、みかんぐみ＋明治大学学生が島独特の材料を使用して建立した「イリコ庵（2016～）」、島の素材を使い、瀬戸内の風を感じさせる作品「Here,There,Everywhere:Project Another Country-Dap-Pay-（2016）」など、イワシ漁や島の暮らし、風俗に根ざした作品を展開した。
今後の展開方針・展開内容
＜鑑賞者の回遊を促す＞ 島の中の各地域に歴史的な独特のポイントがあることから、それら地域の個性と作品とが結びつくように作品展開を進めていく。 より一層住民が参加できるプロジェクトを実施する。 中西讃の島においては、アジア地域と恒常的かつ密接な関係を築いていけるよう、各国の芸術祭やアートグループとの連携も視野に、アーティストを選定する。

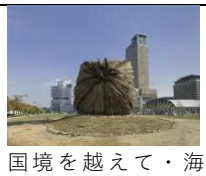
主な既存作品・継続展開プロジェクト

 トイレの家	 イリコ庵	 伊吹島ドリフト伝説

―高松港周辺

特色・コンセプト
島への玄関口、海との出合いの場、芸術祭の総合ステーションとして、瀬戸内の人・コト・モノが集まる交流拠点となっている。 アートやイベントのみならず、「産物」や「食」が集まるマーケットを設置し、芸術祭の来訪者に食の楽しみなどを提供することも目指してきた。また、宿泊拠点となることを視野に、夜の街や港を楽しむプログラムや、来訪者を迎え入れる船の出入りの演出など、にぎわいともてなしのプログラムを提供してきた。
2016 までの取組み
高松港に立つ、高さ 8mものカラフルな 2 本の柱「Liminal Air-core-（2010～)」、芸術祭 2013 で台湾から豊島を航海し、一度台湾に戻って高松港に到着した種の船「国境を越えて・海（2016～)」などシンボリックな作品が設置されている。また、2010 年、2013 年には「高松うみあかりプロジェクト」で多くの市民が協働し、2016 年には、流儀が異なる獅子舞の団体約 50 組が集結する「獅子舞王国さぬき in 高松港（2016)」に新たに取り組んだ。その他、アジアとのつながりを深める取組みとして「ベンガル島（2013)」、「瀬戸内アジア村（2016)」を展開したほか、栗林公園では、瀬戸内の風土や歴史文化などに根ざしたパフォーマンスと地元食材を使った料理を振る舞う「讃岐の晩餐会（2016)」を行った。
今後の展開方針・展開内容
＜芸術祭の母港としての魅力の充実＞ 港一帯が物産、地域のショールームになるように工夫するほか、高松港を拠点にアジアとのつながりをより充実させるようにする。引き続き、屋島も含めた作品展開を充実させる。 高松港周辺で地域のものづくりをアートの視点から見せる拠点を整備する。また、前回芸術祭の APAMS のようなパフォーミング・アートのプラットフォームを整備し、芸術祭に参加する各国からのアーティストや関係者が、週末に集いイベントを繰り広げる。 瀬戸内のシンボリックなイベント（お芝居）を開催する。

主な既存作品・継続プロジェクト

 Liminal Air –core-	 I'm here ここにいるよ。	 待つ人/内海さん	 国境を越えて・海
 銀行家、看護師、探偵、弁護士	 Watch Tower	 ウェルカム/ファニーブルー	

―宇野港周辺

特色・コンセプト
1909 年に本州と四国を結ぶ鉄道連絡船の港湾として整備され、翌年には宇野線が開通し、同時に宇高連絡船が就航した。1988 年の瀬戸大橋完成に伴って宇高連絡船が廃止されたが、民間航路のフェリーターミナルとしての整備がすすめられた。 岡山側から島への玄関口として情報が集まる拠点を目指し、人が集まるプラットホームを設置し、島々への旅のスタートを盛り上げる場所となっている。
2016 までの取組み
宇野港のシンボルとして家庭の不要品を集めて作った「宇野のチヌ（2010～）」を設置し、2016 年にはコチヌも生まれた。「舟底の記憶（2013～）」や「海の記憶（2016～）」といった港を想起させる作品を複数展開し、また、宇野みなと線 4 駅をアート化した「JR 宇野みなと線アートプロジェクト（2016～）」、かつての日本で活躍した連絡船のアーカイブをつくる「宇野港『連絡船の町』プロジェクト」など、瀬戸内海や宇野港が担ってきた役割を再確認し、本州と四国をつなぐ「連絡船の町」として宇野港を特徴づける作品を展開してきた。
今後の展開方針・展開内容
＜連絡船の町のブランド化＞ 連絡船の町としてのブランド化が促進されるような作品展開を行うとともに、過去 3 回の開催の中で充実してきた高校生をはじめとする住民との関係性を強めていく。 市が進める「たまのスチューデントガイド育成プログラム」や「たまの版 CCRsea」と連動するワークショップなどの実施を通じて、作品やイベント、食の提供などを総合的に検討し、作り上げていく。

主な既存作品・継続プロジェクト



宇野のチヌ



終点の先へ



JR 宇野みなと線
アートプロジェクト



海の記憶



宇野港「連絡船の町」
プロジェクト

4-3　アーティスト選考

アーティストの選考は、作品設置場所等の諸条件、地域の素材や住民との関わりなどを考慮し、招待または公募によって行います。選考にあたっては、作家の能力や実績、活動等についてできるだけ幅広い情報を収集し、円滑かつ効果的に選考を行うための体制を整え、また選考の公平性の確保を図るために、前回の芸術祭で新たに設置した「瀬戸内国際芸術祭アーティスト選考アドバイザリーボード」を引き続き設置するとともに、作品公募については、広く国内外から募集します。

招待：サイトスペシフィック＊な作品制作や、コミュニケーションをテーマとする作品展開などに定評・実績のあるアーティスト、並びに新進気鋭のアーティストを国内外から招待します。

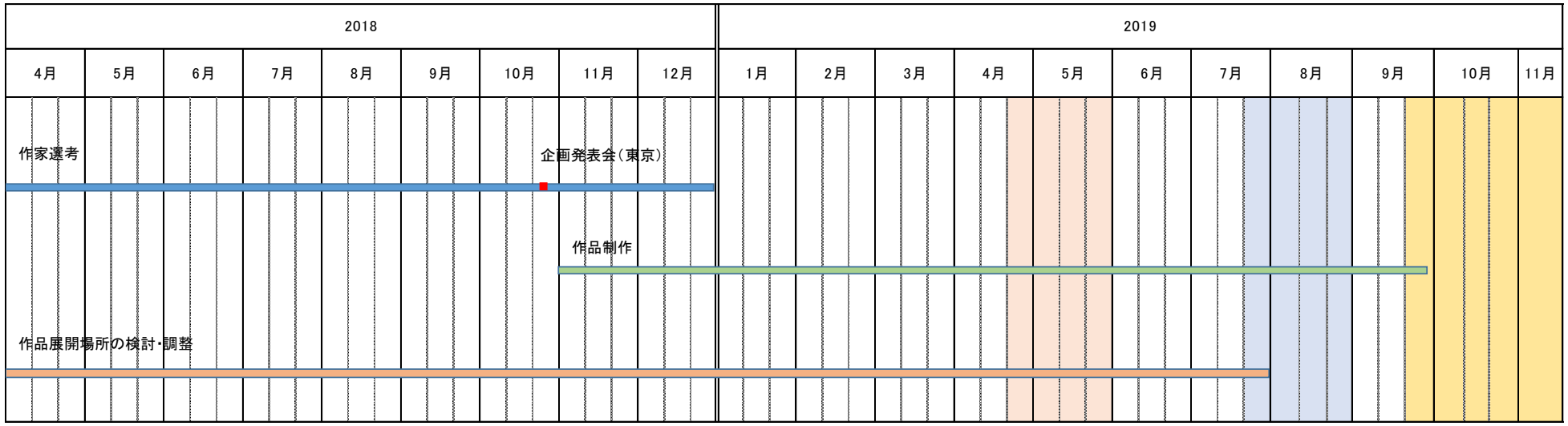
公募：島々の魅力を発見し、地域資源を活かしたアートプロジェクトを広く国内外から公募します。新しい才能の発掘・育成の場とするとともに、事前広報の場としても活用します。
応募受付期間：2018 年 1 月 16 日～31 日

＊サイトスペシフィック
特定の場所に帰属する性質を示し、美術作品の場合は、場所を活かした表現により制作された作品を指す。

瀬戸内国際芸術祭 2019 アーティスト選考アドバイザリーボード委員

椹　木　野　衣	多摩美術大学教授
鷲　田　めるろ	金沢 21 世紀美術館キュレーター

4-4　スケジュール


2018
2019
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
作家選考
企画発表会（東京）
作品制作
作品展開場所の検討・調整

第５章　受入環境の整備

5-1　方針

5-1-1　基本方針

芸術祭の会場の多くは離島です。船に乗って島に渡り、作品にたどり着くまでのプロセス、決して便利とは言えない島の暮らしを体験することそのものがこの芸術祭の魅力であり、特徴ですが、一方でフェリーなどの海上交通の便数や島内の移動手段、島内の宿泊や食事場所には限りがあることから、会期中にはそれらの充実も欠かせません。

島の体験そのものと利便性のバランスを見極めながら、海上交通及び島内交通に関する対策を講じ、来場者の交通手段の確保に努めるほか、高松港・宇野港周辺も含めた宿泊などの受入態勢の充実に努めます。

5-1-2　取組みの概要

船やバスなどの交通事業者や地元市町等との連携を図り、会期中に島と島を結ぶ新規航路の開設や、既存航路の増便などを検討するとともに、規模の大きな島では、バス路線の充実について検討します。高松港や宇野港など、島々への移動の拠点となる港周辺では、駐車場の確保や最寄駅からの交通アクセスの充実を検討します。

また、会期中、十分な数の来場者に対応できるよう、各会場における宿泊などの受入環境について、可能な対応を検討します。

5-2　海上交通

5-2-1　会期中の航路拡充等

来場者の交通アクセスの向上を図るため、会場となる島々を結ぶ航路で、前回の芸術祭開催時と同レベル以上の輸送力を確保できるよう、新規定期航路（臨時航路）の開設や既存定期航路の増便に向け運航事業者と調整します。また、前回それらの対応をしてなお混雑が見られた航路・ダイヤは、増便や付け船（臨時便）などによる拡充を働きかけます。

5-2-2　共通乗船券

来場者の利便性向上や乗船窓口付近での混雑緩和を図るため、フェリー共通乗船券について前回のスキームを基本として検討します。

5-2-3　事前予約サービスの導入

来場者の計画的な周遊のサポートや、運航事業者のより効率的な

混雑対応のため、インターネットを利用した事前予約サービスについて調査・検討し、特に混雑する航路を中心に導入を働きかけます。

5-3　島内交通

直島、豊島、女木島、小豆島、本島においては、前回開催時と同レベル以上の輸送力を確保できるよう、地元市町等と連携しながら、既存バス路線のダイヤの増便等を行います。また、前回の運行状況から走行ルートの見直しが必要と考えられる路線について、関係者と変更に向けた協議を行います。

5-4　本土側のアクセス

5-4-1　本土側港付近の交通

中西讃の島について、公共交通機関の利用による来場に対応するため、地元市町等と連携しながら、島々への玄関口となる本土側の各港まで、最寄りの JR 各駅から接続するシャトルバスを運行します。

5-4-2　臨時駐車場

自家用車での来場に対応するため、島々への玄関口となる各港付近に臨時駐車場を開設します。

5-5　宿泊対策

関係観光協会やホテル旅館等宿泊事業者の団体などを通じて、各宿泊事業者に芸術祭に関する情報提供を行います。

また、上記団体と連携し、公式ウェブサイトや各案内所で来場者に対して宿泊情報を提供します。

5-6　芸術祭鑑賞ツアー

広範囲に点在する数多くの作品を楽しむためには、船やバスのコースをうまく組み立てる必要がありますが、慣れない来場者には、難しさもあります。そのような来場者のニーズに応えるため、各会場の作品を効率よく鑑賞でき、島巡りを存分に味わうことができる芸術祭鑑賞ツアーを実施します。

会場となる島々では、こえび隊やツアー会社などと連携して、アート作品や島の歴史・文化などについて案内するガイド付きツアーを実施することで、より深く芸術祭と島々を知る機会を提供します。

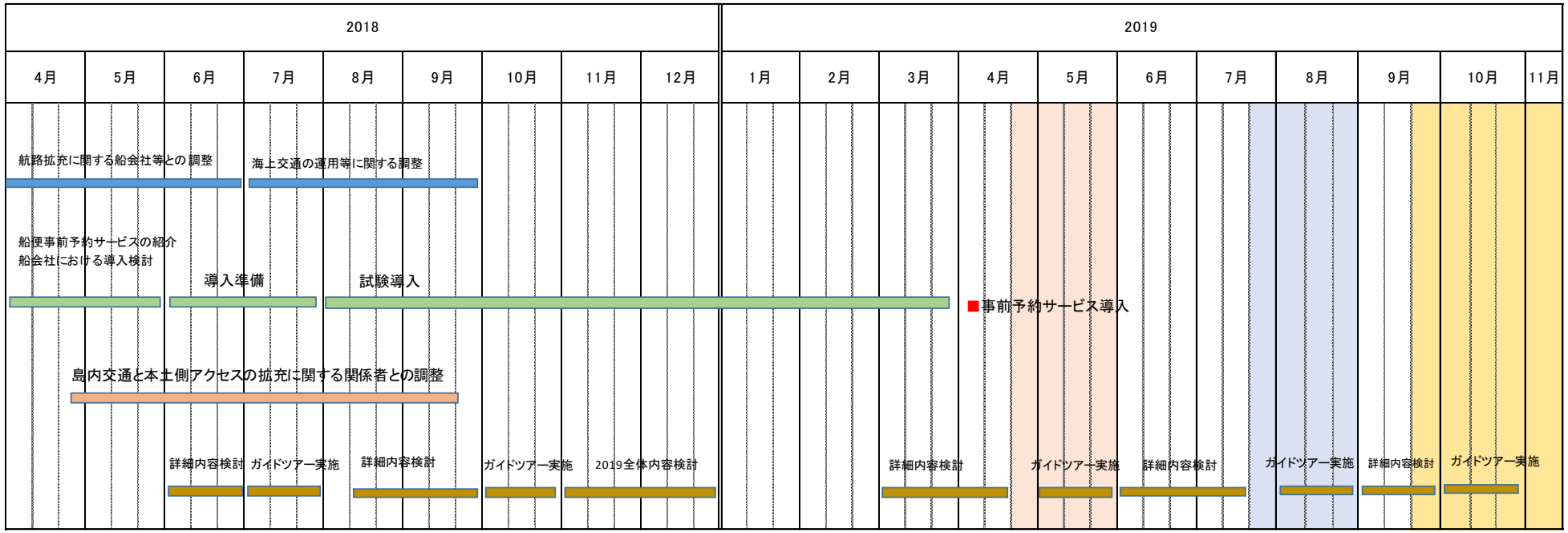
5-7　警護・救急体制の整備

会場となる各島や本土側の港において、芸術祭開催時の混雑対応・安全確保のため必要な場所には、警備員を配置して対応ができるようにします。

緊急時に迅速かつ的確な対応ができるよう、事故・災害の種別ごとの具体的な運用方法を記載した会場別マニュアルを整備します。

会場で傷病者が発生した場合は、消防署との連携のもと、各島の診療所等への協力を要請します。なお、緊急時には防災ヘリや救急艇を活用できるよう関係機関との調整を行います。

5-8　スケジュール


2018
2019
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
航路拡充に関する船会社等との調整
海上交通の運用等に関する調整
船便事前予約サービスの紹介
船会社における導入検討
導入準備
試験導入
■事前予約サービス導入
島内交通と本土側アクセスの拡充に関する関係者との調整
詳細内容検討
ガイドツアー実施
詳細内容検討
ガイドツアー実施
2019全体内容検討
詳細内容検討
ガイドツアー実施
詳細内容検討
ガイドツアー実施
詳細内容検討
ガイドツアー実施

第６章　広報

6-1　方針

6-1-1　基本方針

芸術祭は、テーマである「海の復権」の実現に向けて、現代アートを媒介に、地域の活性化や再生活動につながることを目的としています。

そのためには、アーティストと地域住民、ボランティアサポーターなどによる協働のほか、国、世代、ジャンルを超えた幅広い層からの来場による「交流人口の拡大」が不可欠となることから、広範囲にわたる情報発信を行い、多様な層からの誘客を図っていきます。

同時に、芸術祭を支える仕組みや、地域の自然、文化、歴史、民俗、生活などを包括的に伝えることにより、芸術祭の開催意義を広く伝えていきます。

6-1-2　取組みの概要

企画発表会、地元説明会や島々での関連イベントなどを通じたＰＲ活動を行っていくとともに、ポスター・リーフレットや公式ウェブサイトなど、さまざまな広報ツールにより芸術祭に関する情報をタイムリーに提供します。また、これまで重視してきたパブリシティの活用に加え、よりダイレクトに情報を伝えられるＳＮＳの活用に力を注いでいきます。

さらに、今回の芸術祭においては、海外からの来場者をより一層増加させるため、対象とする地域に応じた、きめ細かい広報活動を行っていきます。

6-2　情報発信活動

6-2-1　ビジュアル展開

日本を代表するグラフィックデザイナーの原研哉が、これまでの芸術祭のブランドイメージを引き継ぎ、芸術祭 2019 の広報デザイン全般を手掛けます。それをもとに芸術祭のイメージを広く伝えていきます。

6-2-2　メディア向け広報

芸術祭の認知度を高めるとともに、芸術祭の開催意義を的確に伝え、ブランドイメージの向上やブランド力の強化を図るため、美術系や旅行系のメディアにとどまらず、社会系のメディアなど、幅広い分野のメディアを対象に情報発信を行います。

また、国内外に向けた積極的な情報発信を展開するため、東京などにおいて企画発表会を開催し取材誘致に取り組むとともに、開幕前の期間においては、瀬戸内フラム塾などがメディアに取り上げら

れるよう働きかけます。

さらに、芸術祭各会期の開幕にあわせ、プレスツアーを開催し、メディア関係者に瀬戸内の魅力を実体験していただくことで、より効果的な情報発信につなげます。

6-2-3　一般向け広報

ポスターやリーフレット、公式ウェブサイト、SNS など多様な媒体を活用した情報発信を行うほか、各種広報誌への掲載などにより芸術祭への来場を促します。

また、地元説明会や島々での芸術祭関連イベントを通じて、芸術祭 2019 の告知とより一層のサポーターの獲得を図ります。

さらに、芸術祭への期待感を一気に高めるため、国内外から人や情報が集まる東京において開幕直前展を開催し、開幕に向けた機運醸成を図ります。

6-2-4　旅行エージェント向け広報

関係自治体や関係団体が実施するプロモーション活動と連携し、東京などの主要都市で、旅行エージェントを対象にした説明会や商談会において芸術祭の魅力を伝えるほか、作品鑑賞や島巡りを楽しめる情報を提供することにより、旅行商品の造成を促します。

6-2-5　海外向け広報

海外のテレビ・雑誌等のメディアによる取材を誘致し、適切に情報提供することにより、正確な情報ができるだけ多くの方々に届けられるような仕掛けを講じていきます。

また、関係団体と協力して発信力の強い SNS ユーザーを招へいするモニターツアーの実施を検討するなど、SNS を活用した芸術祭の情報発信を実施し、海外からの来場者の増加を目指します。

実行委員会の関係団体が実施する海外プロモーション活動と連携し、国内外の旅行エージェントへの情報提供や商談会への参加のほか、大使館や香川アンバサダーなどの協力を得ながら、幅広い層へ芸術祭の魅力を伝えていきます。

6-3　広報ツール

6-3-1　公式ウェブサイト

芸術祭の価値や魅力について、国内外おける認知度をより高めるため、公式ウェブサイトにおいて芸術祭に関するさまざまな情報を集約して発信するとともに、公式ウェブサイトの内容の充実を図ります。

また、現行の５ヵ国語（日本語・英語・中国語（簡体字・繁体字）・韓国語）による多言語化を引き続き行います。

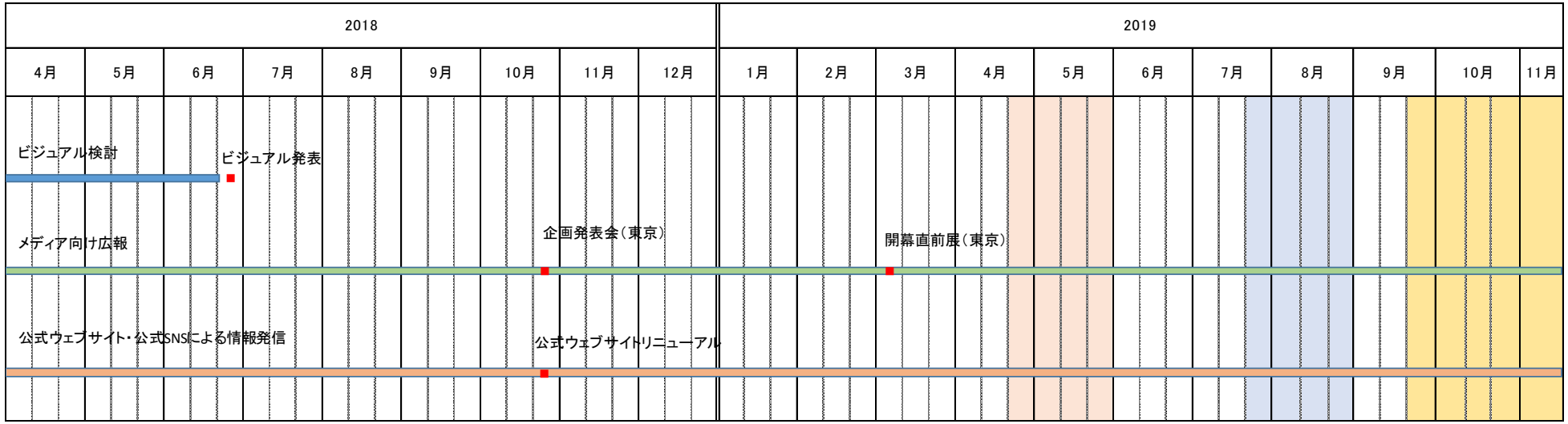
6-3-2　公式 SNS（フェイスブック、ツイッター、インスタグラム）

情報の伝達や拡散などに有効である SNS を活用し、瀬戸内の最新情報や作品制作状況などをタイムリーに発信することにより、利用者が芸術祭をより身近に感じ、来場意欲を高められるよう取り組みます。

6-3-3　ポスター、リーフレット

芸術祭 2019 のポスターとリーフレットを作成し、首都圏や関西圏、中四国などで配布・掲出します。また、空港、駅、港などの交通拠点をはじめ、旅行会社、宿泊施設、大型商業施設、全国の美術館やギャラリーなどの文化施設、美術・建築系大学などの教育施設、連携するアートイベントなどへ効果的に配布・掲出することで、芸術祭のイメージを広く発信します。

6-4　スケジュール


2018
2019
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
ビジュアル検討
ビジュアル発表
メディア向け広報
企画発表会（東京）
開幕直前展（東京）
公式ウェブサイト・公式SNSによる情報発信
公式ウェブサイトリニューアル

第７章　来場者への情報提供

7-1　方針

7-1-1　基本方針

船で島に渡り、多くの人にとっての日常から離れた場所を巡っていくことが芸術祭の醍醐味のひとつですが、船旅・島旅に馴染みのない来場者にとっては、知識や情報、経験の少なさから、心理的な不安を感じる面もあります。そのため、来場者のニーズに応じた十分な情報を、来場者が事前に計画を立てる段階や、実際に現地を訪れてからなど、時期に応じて適切に提供できる体制を整え、スムーズに島々や作品を巡ることができるようにします。

7-1-2　取組みの概要

インターネットやガイドブックを通じて、芸術祭を巡るために必要な情報を来場者が事前に入手できるようにするほか、現地を訪れた来場者には、モバイルアプリなどにより巡り方や作品の開館情報、イベント情報などの情報提供を行えるように検討します。

また、会場となる島々や高松港、宇野港等には案内所を設置するなど、情報の提供や問い合わせへの対応が行える環境を整備します。

なお、これらの検討の際には、海外からの来場者も増加していることを踏まえ、外国語対応について考慮します。

7-2　公式ウェブサイト

公式ウェブサイトに、芸術祭に関する情報を集約し、来場者が得たい情報を５ヵ国語（日本語、英語、中国語（簡体字・繁体字）、韓国語）で、総合的に発信します。また、モバイル用アプリなどと連携し、来場者が島を訪れた際に必要な情報を発信します。

7-3　モバイル用アプリ

iOS とアンドロイド OS に対応した公式アプリを開発し、会場を巡る来場者に最新の情報を提供します。

混雑情報や交通状況など緊急性の高い情報をリアルタイムで提供し、スムーズに作品鑑賞ができるようにするほか、多言語に対応し、増加している海外からの来場者に対しても、リアルタイムに情報を届けます。

7-4　紙媒体

ガイドブックや船の時刻表などの紙媒体により、芸術祭のアート作品情報や交通アクセスなどの情報を掲載し、来場者が島を訪れた際の道案内になるよう情報提供を行います。

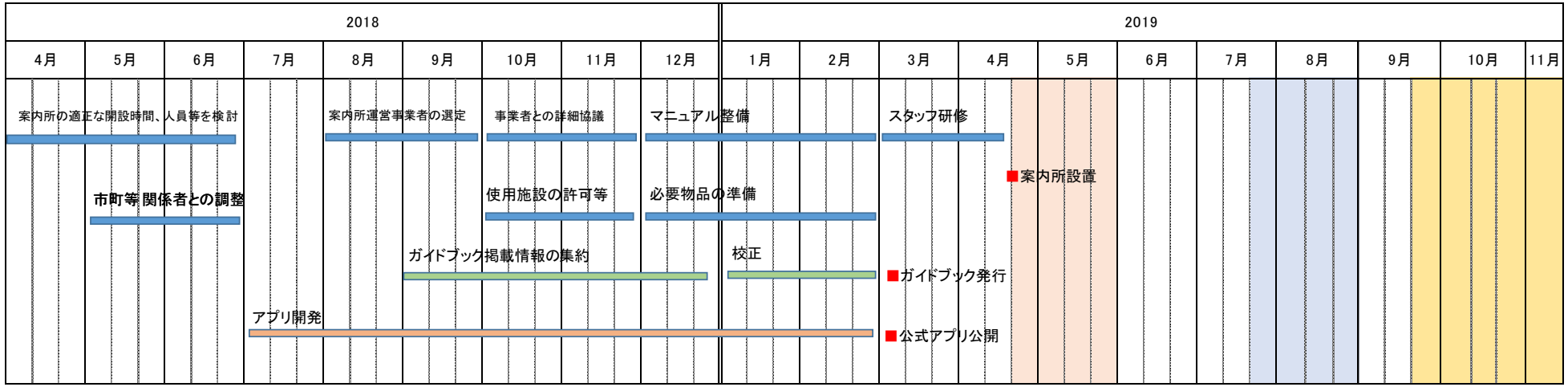
7-5　案内所の設置

芸術祭のマザーポートとなる高松港をはじめ、宮浦港（直島）、宇野港に芸術祭の総合的な案内を行うインフォメーションセンターを設置するほか、会場となる島々や本土側の港、ＪＲ駅等に案内所を設置し、作品やイベントの案内、交通機関や作品施設での混雑情報など芸術祭に関する情報を提供します。

設置に際しては、前回開催時の状況の分析を踏まえ、地元市町等と連携しながら、効率的な開設時間、人員配置を検討します。また、増加している海外からの来場者への厚みのある対応を図るため、外国語対応可能な人員の配置や香川県観光協会が提供する多言語コールセンターを活用します。

案内所種別	業務内容
インフォメーションセンター ・高松港 ・宮浦港（直島） ・宇野港	・芸術祭に関する総合案内 ・各会場の作品やイベント、宿泊、交通等の総合的な案内 ・作品鑑賞パスポート、ガイドブック、グッズ等の販売 ・重点的な外国語対応 ・Wi-Fi 環境の整備 ・観光地等の案内
案内所 ・各会場の島や本土側の港、ＪＲ駅等	・島内の作品やイベント、宿泊、交通等の案内 ・作品鑑賞パスポート、ガイドブック、グッズ等の販売 ・外国語対応（コールセンターの活用を含む） ・Wi-Fi 環境の整備 ・観光地等の案内
ナビスポット ・来場者の動線上、上記案内所を補足するところ	・島内の作品やイベント、宿泊、交通等の案内 ・Wi-Fi 環境の整備

7-6　スケジュール


2018
2019
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
案内所の適正な開設時間、人員等を検討
案内所運営事業者の選定
事業者との詳細協議
マニュアル整備
スタッフ研修
■案内所設置
市町等関係者との調整
使用施設の許可等
必要物品の準備
ガイドブック掲載情報の集約
校正
■ガイドブック発行
アプリ開発
■公式アプリ公開

第８章　芸術祭サポーター

8-1　方針

アーティストと地域をつなぎ、作品と来場者を結ぶ役割を担う重要な存在となるのが国内外から集まるサポーターです。作品制作や会期中の作品やイベントの運営、会期外における島の地域行事への参加など、日本全国、世界中から多くのサポーターが関わって芸術祭を盛り上げることができるよう、関係組織の育成や連携に取り組みます。

8-2　ボランティアサポーター「こえび隊」

8-2-1　取組みの概要

芸術祭 2010 の際に組織されたボランティアサポーター「こえび隊」が引き続き芸術祭を支えます。こえび隊事務局機能を担う「NPO法人瀬戸内こえびネットワーク」が中心となり、各種メディアやＳＮＳを活用し、広く「こえび隊」への参加を呼び掛け、既に活動している「こえび隊」メンバーには、継続的な活動の中で、新しい参加者への情報共有や、アドバイスなど活躍の幅を広げてもらい、「こえび隊」の一層の育成・強化を目指します。

8-2-2　具体的な取組み

「こえび隊」が芸術祭サポーターの中心となり、地域サポーターや企業サポーター等と協力しながら、芸術祭や地域に深く根ざした活動を通して、島と人をつなぎます。

会期前には、アーティストや地域住民と作品制作に取り組み、会期中には、作品受付や島内ガイドを行うなど、来場者がよりスムーズに充実した作品鑑賞ができるよう案内します。

さらに、会期外にも、島の地域行事や文化活動に参加するなど、住民との交流の機会を創出し、地域活性化の取組みを支えます。

また、こえび隊への新規加入者を増加させるとともに、すでに活動しているこえび隊メンバーのスキルアップを図るために、勉強会やミーティングを開催し、芸術祭の趣旨やこえび隊の活動内容についての理解を深め、作品や島に関する知識の習得を目指します。

8-3　地域サポーター、企業サポーター、学生サポーター

8-3-1　取組みの概要

地域住民や地元企業・団体、学校など、地域を最もよく知る人たちが芸術祭に関わり、支えてくれることが、来場者へのおもてなしや、継続的な地域活性化の観点から重要です。前回の芸術祭では、多く

の地域住民が作品の制作に始まり、受付や島を挙げてのおもてなしに参加し、また、企業ボランティアの方も作品受付に加わり、来場者との交流を深めました。今回も引き続き、地域におけるサポーターを増やしていく取組みを行っていきます。

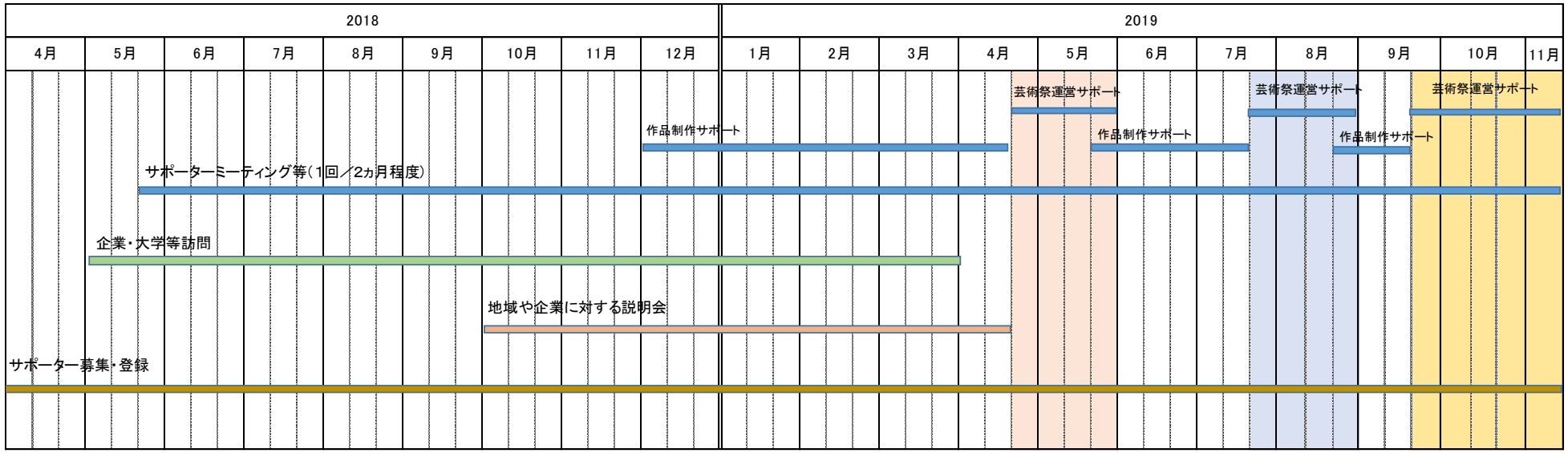
8-3-2　具体的な取組み

地域住民の方に向けて、学校や公民館などで説明会を開催し、芸術祭サポーターへの参加を働きかけます。

サポーター活動を行うことが、アートを通じた地域振興を学び、来場者や島民とのコミュニケーションを図る場となることから、香川・岡山の大学を中心に、インターンシップや履修科目の一環としての学生の参加を働きかけていきます。

地元の企業や団体を訪問し、芸術祭の趣旨やサポーター活動の重要性について説明し、サポーター活動への参加を働きかけます。

8-4　スケジュール


2018
2019
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
作品制作サポート
芸術祭運営サポート
作品制作サポート
芸術祭運営サポート
作品制作サポート
芸術祭運営サポート
サポーターミーティング等（1回／2ヵ月程度）
企業・大学等訪問
地域や企業に対する説明会
サポーター募集・登録

第９章　連携・コラボレーション

9-1　方針

芸術祭の盛り上がりは、今や会場の島々だけにとどまりません。さまざまな主体が芸術祭に呼応して行う取組みが、全国、世界に広がりつつあります。

プロモーション活動などにおける企業等との連携、瀬戸内エリアや香川・岡山エリアで行われる文化事業との連携により、瀬戸内国際芸術祭の発信力を高めていきます。

9-2　寄付・協賛等

9-2-1　取組みの概要

芸術祭の趣旨に賛同していただける個人や企業等から寄付・協賛を募り、芸術祭と社会とのつながりを広げていきます。

9-2-2　寄付募集の取組み

芸術祭の趣旨に賛同する個人からの寄付を募集します。ウェブサイトやチラシによる案内のほか、企業・団体を通じた個人への働きかけや、ふるさと納税やクラウドファンディングの仕組みを利用し、幅広い層から寄付を募ります。

9-2-3　協賛募集の取組み

芸術祭の趣旨に賛同する企業に対し、現金、現物提供による協賛を募ります。より多くの協賛を得られるよう、協賛金額に応じた特典の仕組みを検討します。

9-2-4　企業等パートナー制度

前回に引き続き、一定金額以上の協賛や独自の事業により支援していただける企業・団体を「瀬戸内国際芸術祭パートナー」と称し、さまざまな形で連携を行うことにより、相互の協力関係を築きます。

9-3　他の文化・芸術事業との連携

9-3-1　県内連携事業

香川県内の市町や団体が実施する建築・アートを主体としたイベントなど、相乗効果が期待できる事業と連携し、芸術祭の来場者が各イベントを巡るよう促すことで、芸術祭の開催効果を広く波及させます。

9-3-2　他地域で開催される国際芸術祭との連携

アジア諸国をはじめとする世界各国とのつながりを一層強めていくために、国内外で開催されている国際芸術祭と連携し、相互広報を実施します。

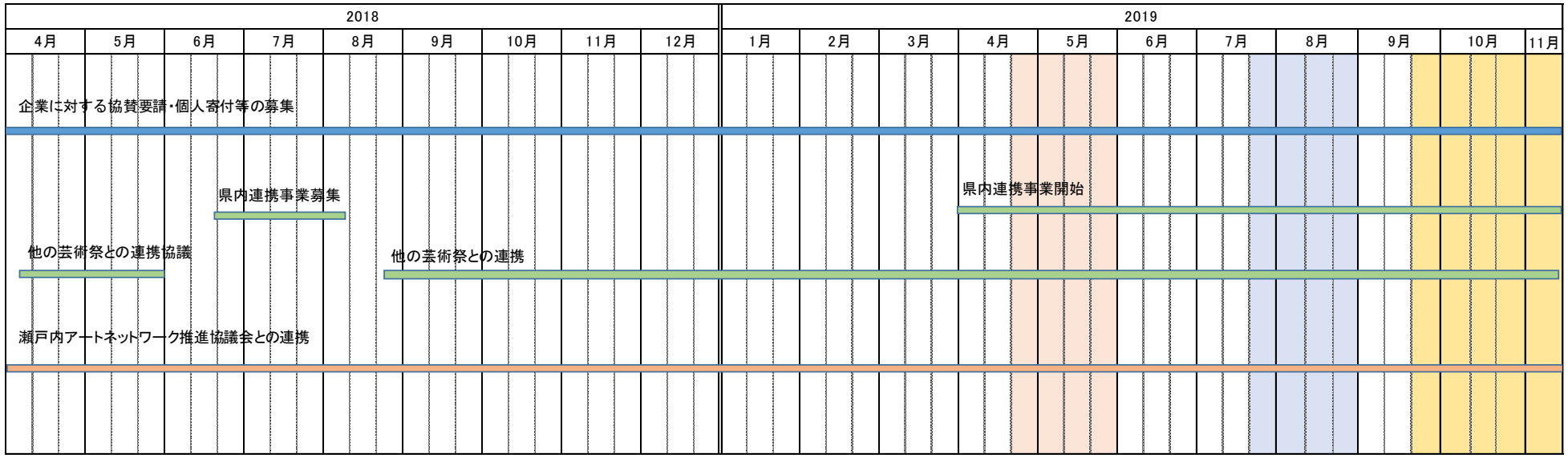
9-3-3　美術館等との連携

瀬戸内アートネットワーク推進協議会の構成団体が実施する独自企画と連携して PR することにより、文化・芸術による地域活性化を広域的に促進します。

9-4　割引協力施設

芸術祭会期中、作品鑑賞パスポートの掲示で、入場割引やプレゼントなどの特典が受けられる割引協力施設を募集し、来場者の利便性向上に努めます。

9-5　スケジュール


2018
2019
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
企業に対する協賛要請・個人寄付等の募集
県内連携事業募集
県内連携事業開始
他の芸術祭との連携協議
他の芸術祭との連携
瀬戸内アートネットワーク推進協議会との連携

第 10 章　チケット、グッズ開発

10-1　方針

10-1-1　基本的方針

来場者にできるだけたくさんの島を巡り、多くの作品を楽しんでもらえるような利便性の高いチケット制度を検討します。また、芸術祭の思い出を持ち帰ることができるよう、魅力のあるグッズの開発を検討します。

10-1-2　取組みの概要

過去の芸術祭での来場者のチケット利用状況などを検証し、利用者のニーズに対応し、より分かりやすく利用しやすいチケットの仕組みを検討します。

グッズについても、過去の販売状況などを分析しながら、オフィシャルグッズの開発や、関連商品の取扱いを検討します。

10-2　チケット

10-2-1　制度概要

作品鑑賞パスポートは、海外からの来場者の増加などに伴う多様な旅行形態に対応すべく、3 シーズンすべて有効なものと、1 シーズン限り有効なものの 2 種類を用意し、購入しやすい価格を検討します。

パスポートの販売管理及び販売チャンネルの充実を図るため、チケット管理センターを設けます。

単体で作品を鑑賞する場合の個別鑑賞料は、作品に応じて適正に設定します。

10-2-2　販売方法

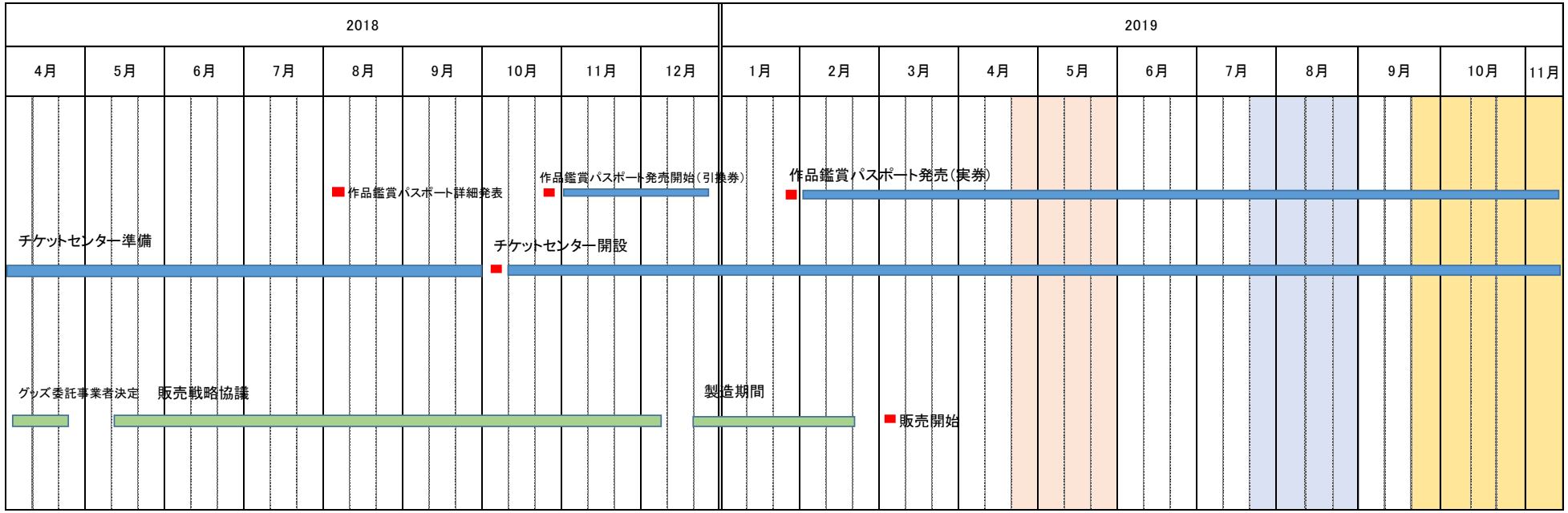
大口割引やツアー商品へのパスポートの組込みなどを検討し、販売促進につなげます。海外からの来場者の増加に対応すべく、海外から購入できるインターネット販売サイトや海外の旅行会社・航空会社などでの販売を検討し、海外からの来場者が購入しやすい環境を整備します。

10-3　グッズ開発

これまで販路・販売期間が限られていたグッズの販売戦略を再考し、販売機会を増やして、より来場者の手に届きやすくします。

また製作から在庫管理までを一体的に行い、収益の最大化が図られるよう流通の仕組みを改善します。

10-4　スケジュール


2018
2019
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
作品鑑賞パスポート詳細発表
作品鑑賞パスポート発売開始（引換券）
作品鑑賞パスポート発売（実券）
チケットセンター準備
チケットセンター開設
グッズ委託事業者決定
販売戦略協議
製造期間
販売開始

第 11 章　地域への波及

11-1　方針

芸術祭の開催を契機に、地元の住民が中心となり、会場付近の清掃活動や地元の食の提供、来場者への島内ガイドなど、地域の活性化につながる取組みが各島で行われるようになりました。こうした活動が一過性のものとはならないよう、幅広い世代にわたり継続していく機運を高める取組みを行っていきます。

11-2　島間交流

11-2-1　取組みの概要

芸術祭の会場となっている島の住民が他の島を訪れ、他の島の取組みの好事例を参考にしてもらうとともに、島おこしの取組みなどについて情報交換を行うことで、島と島との間における人的ネットワークの形成を支援します。また、そこで生まれたネットワークをもとに、住民が主体となった地域活動の活性化を図ります。

11-2-2　具体的な取組み

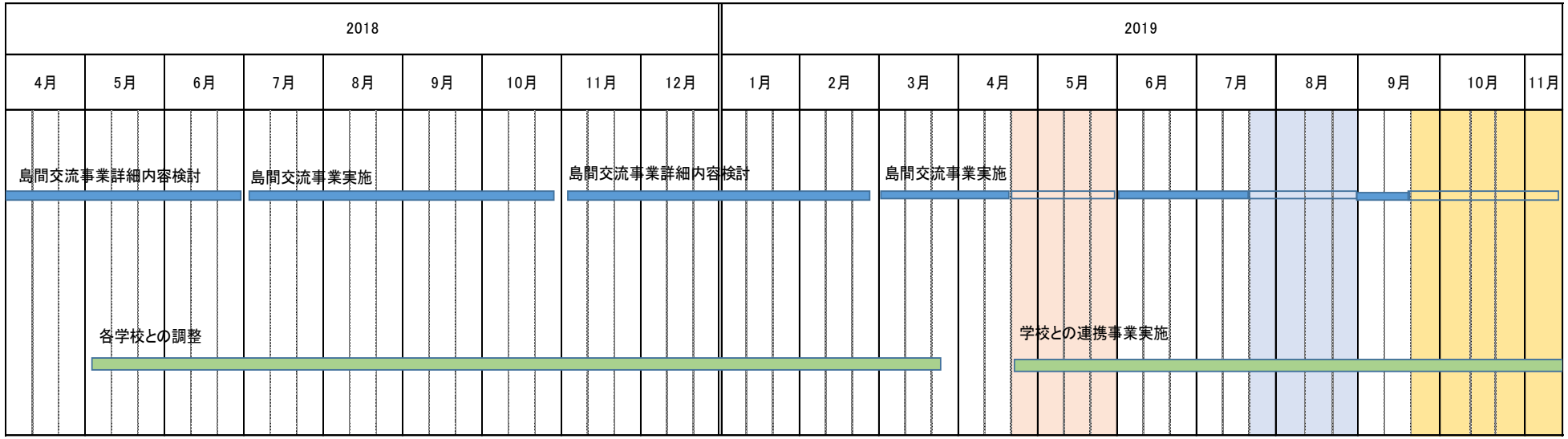
島の活性化につながる活動を行っている人、活動の意思がある人を中心に募集し、各島で継続して公開している作品の鑑賞のほか、ART SETOUCHI イベントや地元で開催されるイベントなどに参加し、地元住民と交流する時間を設けます。

また、芸術祭 2019 の開催に合わせ、季節に応じて各島で訪問団を結成し、他島の住民同士が交流する場を設けます。

11-3　学校との連携

小・中学生から大学生まで、芸術祭に関わる課外活動の実施を促進することにより、次代を担う若者や子供達が、地域の課題にふれると同時に、世界とつながる機会を創出します。

11-4　スケジュール


2018
2019
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
島間交流事業詳細内容検討
島間交流事業実施
島間交流事業詳細内容検討
島間交流事業実施
各学校との調整
学校との連携事業実施

第１２章　収支計画

○収　入

（単位；百万円）

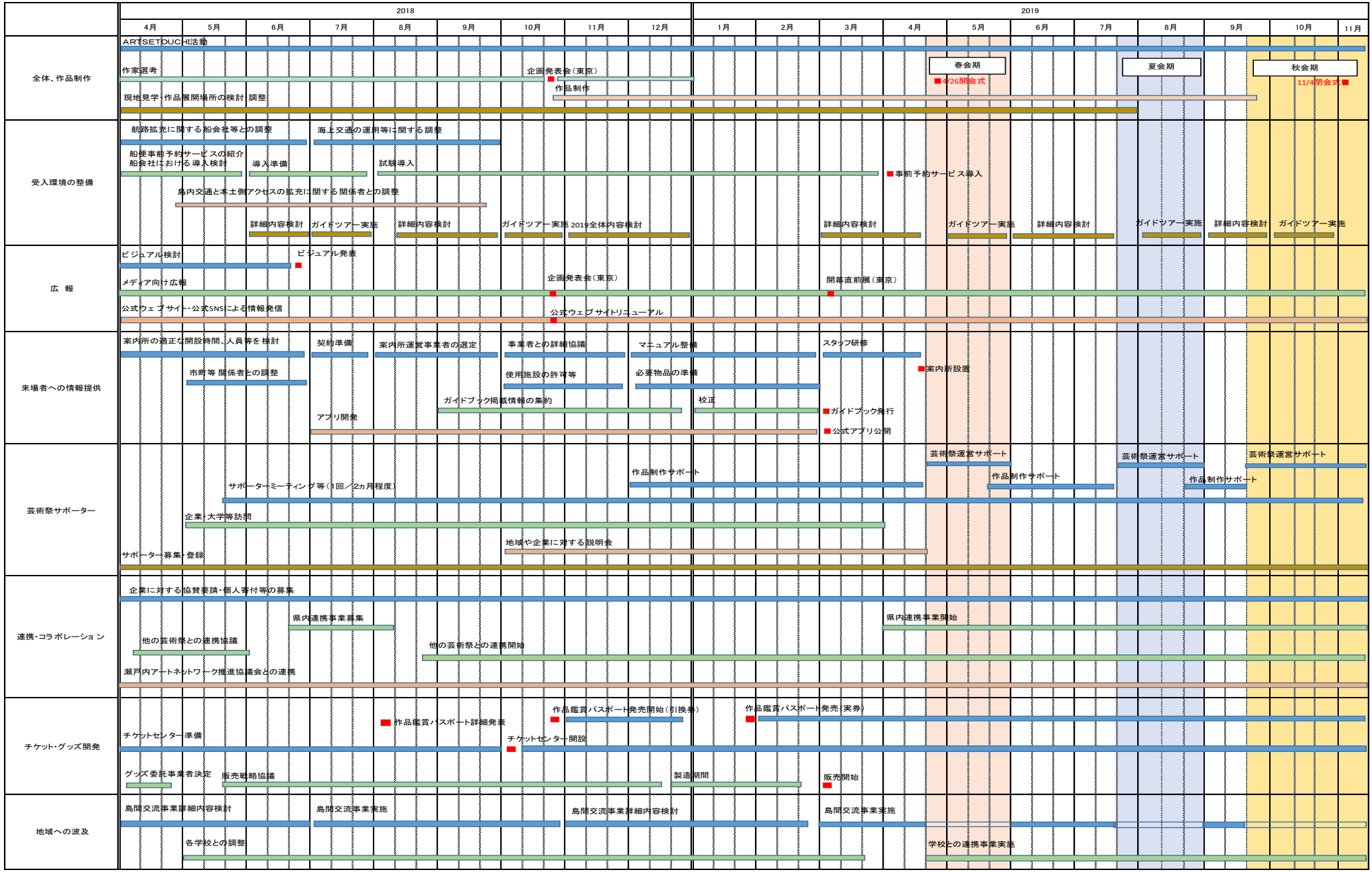
内　　容	H29	H30	H31（見込）	計
負担金	24	297	297	618
補助金・助成金	28	52	75	155
寄付金・協賛金	4	113	17	134
チケット等販売収入	1	22	253	276
その他	1	1	1	3
前年度繰越金	96	90	216	402
翌年度繰越金※	△ 113	△ 236	－	△ 349
収　入　計	41	339	859	1,239

※ART SETOUCHI運営費への繰出金を含む。

○支　出

内　　容	H29	H30	H31（見込）	計
アートプロジェクト費	19	195	481	695
運営活動費	22	119	344	485
広報活動費	13	76	86	175
交通対策費	0	2	22	24
会場等運営費	3	23	219	245
事務局運営費	6	18	17	41
チケット・グッズ等制作費	0	22	30	52
予　備　費	0	3	4	7
支　出　計	41	339	859	1,239

（参考）　全体スケジュール


2018
2019
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
全体、作品制作
ARTSETOUCHI活動
作家選考
企画発表会（東京）
春会期
夏会期
秋会期
4/26開会式
11/4閉会式
現地見学・作品展開場所の検討 調整
作品制作
受入環境の整備
航路拡充に関する船会社等との調整
海上交通の運用等に関する調整
船便事前予約サービスの紹介
船会社における導入検討
導入準備
試験導入
事前予約サービス導入
島内交通と本土側アクセスの拡充に関する関係者との調整
詳細内容検討
ガイドツアー実施
詳細内容検討
ガイドツアー実施
2019全体内容検討
詳細内容検討
ガイドツアー実施
詳細内容検討
ガイドツアー実施
詳細内容検討
ガイドツアー実施
広　報
ビジュアル検討
ビジュアル発表
メディア向け広報
企画発表会（東京）
開幕直前展（東京）
公式ウェブサイト・公式SNSによる情報発信
公式ウェブサイトリニューアル
来場者への情報提供
案内所の適正な開設時間、人員等を検討
契約準備
案内所運営事業者の選定
事業者との詳細協議
マニュアル整備
スタッフ研修
案内所設置
市町等関係者との調整
使用施設の許可等
必要物品の準備
ガイドブック掲載情報の集約
校正
ガイドブック発行
アプリ開発
公式アプリ公開
芸術祭サポーター
芸術祭運営サポート
芸術祭運営サポート
芸術祭運営サポート
作品制作サポート
作品制作サポート
作品制作サポート
サポーターミーティング等（3回／2カ月程度）
企業・大学等訪問
地域や企業に対する説明会
サポーター募集・登録
連携・コラボレーション
企業に対する協賛要請・個人寄付等の募集
県内連携事業募集
県内連携事業開始
他の芸術祭との連携協議
他の芸術祭との連携開始
瀬戸内アートネットワーク推進協議会との連携
チケット・グッズ開発
作品鑑賞パスポート詳細発表
作品鑑賞パスポート発売開始（引換券）
作品鑑賞パスポート発売（実券）
チケットセンター準備
チケットセンター開設
グッズ委託事業者決定
販売戦略協議
製造期間
販売開始
地域への波及
島間交流事業詳細内容検討
島間交流事業実施
島間交流事業詳細内容検討
島間交流事業実施
各学校との調整
学校との連携事業実施